耐候性鋼材は条件によっては無塗装で使用可能であるが、その条件として耐候性鋼材による安定さびの形成が阻害されない地域であることが前提である。

この安定さびの形成に影響する因子として飛来塩分量、亜硫酸ガス量、鋼材の方向（水平・垂直）が該当する。一番影響を及ぼすのは飛来塩分量であり、よって福井の特に海から近い沿岸部では海からの塩分がとても大きな影響を与える。また、福井は北陸地域であり、比較的雪の多い地域であるので融雪剤や凍結防止剤の塩分も海からの塩分ほどではないが考慮する必要がある。

そして、無塗装での使用地域を拡大させるには各地域で耐候性鋼材の使用条件である「飛来塩分量≦0.50mg(0.05mdd)」を満たすかどうかの調査をしなければならない。

今回の講義では主に橋梁の建設・構造、そして腐食について学んだが自分が想像していたよりもとても複雑で、さまざまな影響を考慮する必要があるのだと知った。

例えば耐候性鋼材では、コストを考えると無塗装が望ましいが、無塗装にしようと思うと細かい条件が必要であったりするので一つの橋を建設するだけでもたくさんの事に気を配らなければいけないことが知れた。今回の講義は自分の学科とは少し離れるが、様々な条件式や化学反応などの幅広い知識が必要になってくるのが建築学の面白いところだと思った。

今回学んだ知識はこの先使うことがあるかは分からないが、広い見方をして問題の対策法をみつけるのが大事なことだと感じた。